

# 「ギャルゲで学ぶシリーズ」発刊に際して

---

かつて「犯罪者予備軍」というレッテルを貼られ続けた「オタク」という固有名詞も、偉大なる先達の甲斐あってか、はたまた自由主義的な時代の要請によってか、現代においては「専ら一つの事柄に熱中する人」として社会に受け入れられるようになってきている。

ところが、オタク文化の黎明期を築き上げてきたギャルゲという文化は、オタクが一般化した現代ではむしろ、斜陽化の一途を辿っている。

アニメやマンガは広く認知されていても、「ギャルゲが好きです。」という、怪訝な顔をされることがしばしばある。確かに、「ギャルゲ」という単語から、「恋愛をしたことがないから二次元のおにゃのことイチャイチャするチー牛弱者男性向けコンテンツ」\*1という連想、あるいは誤解をされてしまうのは仕方がないことかもしれない。とはいえ、ギャルゲの実はそうではない。いや、仮にそうであったとしても、一人のオタクとして、大好きなものは大好きだって言いたい。

――私は物理が好きだ。数学が好きだ。そして何より、ギャルゲーが大好きだ。

ギャルゲから生きる勇気もらった。生きる意味を教えてもらった。ギャルゲーはきっと、私の人生の旅の、善き伴侶となって、これからも、私に寄り添ってくれるのだろう。

そんな、斜陽化しつつも、私を支えてくれたギャルゲに何か恩返しができないか、そんなことを始終考えていた。

私には、所謂二次創作や布教を行えるほどの、卓越した文才も、画才もありはしない。けれども、幸か不幸か、どうやら人並み以上には物理学と数学の素養があるようだ。

もちろん、その素養たるや、その道の第一線で活躍する研究者たちには到底及

---

\*1 ギャルゲ好きの中にも強者はいるはず。多分。

ばない。それでも、何か私にでもできることといえば、それしかないように思えた。それこそが、私の「ただ一つの仕事」\*2のように思われた。

私のただ一つの仕事とは、「ギャルゲの登場人物に物理や数学を教えてもらう、合同誌を編纂しよう。」という単純明快なものである。

大学で学ぶ物理や数学は、その実こそ面白く、興味深くはあっても、扱う道具の高級さ、議論の高尚さといった面から、その道を志すものでもなければ難解で、ときには億劫さを感じてしまうこともあるだろう。

ゆえに、本シリーズでは、魅力的なギャルゲのキャラクターの描像を生き生きと描くだけでなく、なるべく一般向けに、なるべくわかりやすく解説するよう努めたつもりである。\*3

本シリーズの内容は、その分野を専攻する方にとっては、ときに冗長で、ときに物足りなく感じてしまうことも多々あるだろう。とはいえ、あくまでこのシリーズは学問的な厳密さ云々よりも、その分野の面白さを知ってもらうことこそ本懐ゆえに、厳密な議論は他書に譲るものとしてご容赦いただきたい。\*4

この「ギャルゲで学ぶシリーズ」によって、一人でも多くの読者を深遠なる学問の沼にいざなうことはもちろん、ギャルゲーという芸術への招待が叶ったのならば、それはまさしく我々筆者の望外の喜びである。

2025年7月 編者: 和  $\Sigma\chi$

---

\*2 「俺は、ただ一つの仕事を成し遂げるために、無知の人となった。だからこそ、俺は、どこから来たのか、何者か、どこに行くべきか、知った。」サクラノ刻より

\*3 大学の教科書の標榜する「わかりやすい」は地雷が多いけれど、本シリーズはちがうはず……

\*4 とはいえ、発展的な項目も必要であれば適宜追加した。